

## 概 説

平成 16 年の前回調査結果（福井県福祉環境部自然保護課，2004）からは、人間の生活圏・産業圏の拡大による自然植生の破壊、園芸目的の採集、産業構造の変化による里地里山の二次的環境の管理放棄や改変が、本県の植物相に多大な影響を与えていることが浮き彫りになった。

それ以降、行政による施策だけでなく、県民の自立的な意識の向上も見られ、様々な民間団体・個人によって、生物多様性保全に関する取り組みが行われてきた。三方五湖、中池見湿地がラムサール条約湿地に登録され、平成 25 年 9 月には本県において「SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ第 4 回定例会合」が開催されるなど、自然環境の保全に向けて起点となる出来事もあった。前回の福井県レッドリストはそれらの取り組みの指標として効果的に用いられてきた。

しかしながら、新たに組み込まねばならない課題も持ち上がってきている。過疎化・高齢化が深刻な山村での里地里山の管理放棄は拡大しており、二次的環境の保全はますます困難になっている。また、地球温暖化はその影響が表れ始めている。亜高山・高山植物など冷涼な環境に生育する植物への影響が懸念され、積雪の減少によるシカ・イノシシの増加・分布拡大は、農林業地だけでなく、自然植生にも被害を与えている。さらに、平成 16 年 7 月の福井豪雨に代表される想定外の気象現象が頻発しており、植生に与える影響も懸念される。今回の福井県レッドデータブックの改訂では、これまでの取り組みの評価に加えて、新たな脅威に対しての評価も考慮して作業を行った。また、最近の風潮として、意識的に貴重種（園芸もの）を野生化しようとする動きがあることも注意すべきであろう。

本県の維管束植物はこれまでに、約 2700 分類群（種、亜種、変種を含む）が確認されている（渡辺，2003）。今回の調査では、県域絶滅として 20 種類、県絶滅危惧Ⅰ類 235 種類、県絶滅危惧Ⅱ類 199 種類、県準絶滅危惧 119 種類、要注目 158 種類の計 731 種類がリストアップされている。前回の 458 種類に比べて大幅に増えているが、これは前回対象にしなかった亜高山・高山性植物 175 種を今回リストアップしたためである。これは、登山者の増加により、踏みつけやマニアによる園芸採取などの危機が強まっていること、また、温暖化の進行による亜高山・高山の環境の変化が予測されるからである。

県域絶滅とされる種は、前回から 7 種類増加し、20 種類となった。新たに加わったもののうち、イヌハギ、ミズスギナ、イヌナズナ、キンギンボク、イワヒゲ、イヌセンブリ、カワラボウフウは、近年行われた県内標本の再検討によって、かつては県内に生育していたことが確認されたものの、近年の記録がないものである。また、前回調査では絶滅危惧Ⅰ類であったが、近年の記録が得られていないアオネカズラ、ハイハマボス、ヒシモドキは、今回、新たに県域絶滅と判断された。県域絶滅種の多くは、水湿地や草地に生育するものが多い。人間の生産活動、自然遷移の進行によって生育環境の消滅、悪化が絶滅の主な原因と考えられる。一方、これまで県域絶滅とされていたサギソウとリュウノヒゲモが再確認されたため、県域絶滅から除外された。しかしこれらは絶滅寸前であり、何らかの保護策をとらなければ再び絶滅種としてリストアップされることになる。

現在、県内では絶滅寸前であり、保護対策を講じる必要がある絶滅危惧Ⅰ類として、235 種類が選定された。前回（159 種類）に比べ、76 種類増加している。このランクには、新たに調査対象とした奥越地方の亜高山に局地的に生育している種類が多く加わっている。また、エチゼンシノブ、フクジュソウ、エチゼンミスミソウ、ソメワケキンキマメザクラ、アゼオトギリ、オオアブノメは、前回調査以降に新たに本県での自生が確認され、かつ、生育地・生育数が限られている種類で、絶滅危惧Ⅰ類と判断された。前回調査では、絶滅危惧Ⅱ類以下にランクされ、今回ランクアップされたのは 56 種類である。それらのうち、モミジチャルメルソウ、ヒメガンクビソウ、ウスバミヤマノコギリシダなどの生育地が嶺南地方に限定されている種類は、シカの食害に伴う環境変化の影響が懸念される。しかし、ナチシダは、シカの食害を受けないため、現状では増加の傾向にあることが指摘された。

絶滅危惧Ⅰ類に、将来の絶滅が危惧される絶滅危惧Ⅱ類（199 種類）を加えると、本県の絶滅危惧種は、434 種類となった。さらに、生育基盤が脆弱な準絶滅危惧種（119 種）を合わせると 553 種類にのぼり、県内に野生している維管束植物の 5 種類に 1 種類が絶滅の危機にさらされていることが判明した。今回、亜高山に生育する種も対象に加え、調査研究の進展による新たな情報も加わったための増加も含まれるものの、現在でも野生植物は減少傾向に

あり、危機的状況であるといわざるを得ない。

(横山 俊一)